

座長のことば

感覚器領域における薬物治療の最近の進歩

杉山 篤

東邦大学医学部薬理学講座・教授

感覚器官用剤として代表的なものは眼科用剤と耳鼻咽喉科用剤の2つである。眼科領域における薬剤の投与方法としては、点眼、眼軟膏塗布、結膜下注射、テノン嚢内注射、球後注射、眼内注射などがあり、内服や点滴による投与もある。薬物治療の対象疾患としては、ドライアイ、眼瞼痙攣、結膜炎(アレルギー性、細菌性、ウイルス性)、角膜感染症、緑内障、白内障、散瞳・調節麻痺、眼精疲労、加齢黄斑変性がある。一方、耳鼻咽喉科領域における薬剤の投与方法としては、全身投与の他に、感染部位や炎症部位への直接的な薬剤投与による局所治療(点耳、点鼻、吸入など)がある。薬物治療の対象疾患としては、耳疾患では外耳炎、急性中耳炎、慢性中耳炎、突発性難聴およびメニエール病

が、鼻・副鼻腔疾患では鼻出血、急性副鼻腔炎、慢性副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎(花粉症、通年性)および嗅覚障害がある。近年の各感覚器官用剤には大きな進化が見られるので、今回の第72回東邦医学会総会においては、「感覚器領域における薬物治療」と題して、各分野のご専門の小松哲也先生(大森眼科)、井田裕太郎先生(大森耳鼻科)ならびに安東賢太郎先生(千葉科学大)にそれぞれのお立場から最近のトピックをご講演いただくシンポジウムを企画した。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2019-001